

## 自由と予定

クリストフ・ウィティキウス『神の現実的摂理』におけるデカルト解釈

坂本邦暢(明治大学)

ライプニッツは『弁神論』のなかで、ネーデルラントで活動したデカルト主義者にしてカルヴァン派の神学者であるクリストフ・ウィティキウス(Christoph Wittichius, 1625-87)の学説を批判している(第3部 298節)。ライプニッツによれば、ウィティキウスは自由について論じるに際して、人間の独立性を弱めてしまったという。というのもウィティキウスは、人間が自由であるのは、その意志を神が産出するからだと主張しているからである。意志を産出するのが人間ではなく神だとするなら、意志によってなされる行為も人間のものではなく、神のものになってしまうだろう。以上のような批判をするにあたってライプニッツが参照しているのは、ウィティキウスの『神の現実的摂理』 *De providentia Dei actuali* という論考である。これはウィティキウスが1672年から73年にかけてライデン大学で主催した討論の記録として最初に公刊され、1681年には『神学についての諸論考』 *Dissertationes variae in theologia* という著作に収録された。

ライプニッツによる批判は、少なくとも二つの疑問を引き起こす。第一のものは、ウィティキウスの学説とデカルトの哲学の関係である。ウィティキウスは『神の現実的摂理』ではデカルトに明示的に言及していないものの、随所でデカルトの著作から文言を借り受けている。この意味で、同著作の前提にデカルトの哲学があるのは間違いない。しかし、ウィティキウスの見解がデカルトの哲学に完全に忠実であるとも思われない。デカルトは自由の根拠として、人間の意志の神による産出を挙げていない。むしろ『哲学の原理』では、人間の自由と神による予定を両立させることの困難さを指摘している。ここから分かるように、ウィティキウスの学説はデカルトの著作に依拠しながらも、そこから必ずしもデカルト本人は同意しないであろう結論を引き出している。このようなデカルト解釈をウィティキウスはいかに行ったのか。ウィティキウスによる「意識している(*consciens*)」という用語の利用や、連続的創造説の採用の検討を通じて、この問いに答えるのが本報告の第一の目標である。

上記の問いからは、直ちに第二の問いが生じる。なぜウィティキウスはデカルトから離れたのだろうか。人間の自由と神の予定の両立の困難さを認めるところでとどまらず、予定による神の産出の働きを強調し、(ライプニッツが指摘したように)人間の独立性を弱めたのはなぜだろうか。この問いに答えるためには、ウィティキウスが神学者でもあったことに注目しなければならない。ネーデルラントで活動するカルヴァン派の神学者として、ウィティキウスは正統的とされる教義への忠誠を明確にしておかなければならなかった。当時の正統主義の規準となっていたのは、1619年に定められたドルトレヒト信仰規準である。そこでは、ヤコブス・アルミニウスの教えが、神からの人間の独立性を強めるペラギウス主義の過ちに陥っているとして、断罪されていた。この批判は、デカルトの哲学にも向けられることになる。神の予定と人間の自由の両立を困難とするデカルトは、本当のところ予定の役割を縮減し、人間の独立を説くペラギウス＝アルミニウス主義者に他ならないと神学者たちは批判した。この批判に応じるために、ウィティキウスは人間の独立性を弱めるデカルト解釈を行ったというのが本報告の仮説である。この仮説を検証するために、『神の現実的摂理』の原罪をめぐる議論のなかでの、ウィティキウ

スのアルミニウス批判を検討する。

以上の二つの問いに答えることで、17世紀後半のデカルト哲学の解釈が有していた神学的な側面の重要性を明らかにすることが、本報告全体の目標となる。

\* 本報告は、加藤喜之博士と共同で行っている研究の成果を、加藤博士の許可を受けた上で、坂本が報告するものである。